

エゾノタチツボスミレ

Viola acuminata

スミレ科

名前の由来

北海道(蝦夷)のタチツボスミレという意味。タチツボスミレはツボスミレに似ているが、より株立つことから由来する名前。「ツボ」は庭のことで、ツボスミレは庭に生えるスミレという意味。「スミレ」は花の形が大工の使う墨つぼに似ているということで、「墨入れ(スミイレ)」から変化した名前だと言われている。漢字名：蝦夷立坪堇



エゾノタチツボスミレ

形態的特徴

高さ20~40cmと大型のスミレだが、草丈に比べると花は小さく見える。花の後はさらにのびて、50cmにも達する。葉はハート形から長い三角形。花は径1.2~2cm、色は淡紫色から白色まで変化がある。花には5枚の花びら(花弁)があり、上半分についている2枚を上弁、下半分についてい

る花びら3枚のうち、左右の2枚を側弁、真ん中の1枚を唇弁という。側弁の基部に毛が生えているか否かはスミレ類を見分けるポイントのひとつであるが、本種は側弁の基部に毛が多く生えるのが特徴。花の後背部の「距」と呼ばれるつき出た部分は、白色でやや短い。

類似種と見分け方

タチツボスミレ、オオタチツボスミレ。

本種と類似種の3種はよく似ており、区別しにくい。花の後ろにつきだた「距」の長さや色、また側弁の基部に

毛があるか否かで見分けることができる。エゾノタチツボスミレは距が短く白色で、側弁の基部に毛が多く生える。



エゾノタチツボスミレ。側弁基部は有毛



タチツボスミレ。側弁基部は無毛



オオタチツボスミレ。側弁基部は無毛で、白く長い距が見える



エゾノタチツボスミレ。距は白く短い



タチツボスミレ。距は長く紫色

生活サイクル

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
開花期		■	■									
結実期			■	■								

生育環境・分布

落葉樹林内や草原に普通に見られる。

分布：千島・樺太・シベリア東部・中国・朝鮮に分布する。

国内分布は、北海道から本州中部以北に分布する。

北海道内分布は、ほぼ全域に分布するが、太平洋側や内陸に多い。

十勝地方生育状況は、落葉樹林内や草原に普通に見られる。しばしば群生する。



エゾノタチツボスミレの群落

生活史

開花時期：5中旬～6月

開花までの年数：不明

寿命：多年草。

他生物との関わり

花には虫が訪れる。

タネの付着物（エライオソーム）はアリが好み、巣まで運ぶ。（→興味深い話の項参照）

ミドリヒョウモン、ウラギンスジヒョウモンなどのヒョウモンチョウ類の幼虫の食草となっている。



ミドリヒョウモン(裏)。エゾノタチツボスミレなどのスミレ類を幼虫時の食草とする。

(標本-吉原利之氏所蔵)

興味深い話

■果実は熟すと風で揺れた拍子などで3片に勢いよく裂け、その裂開力によって中のタネをはじき飛ばし、タネをより遠くへ分散させている。

■スミレ類のタネにはアリが好む付着物(エライオソーム)がついており、それを目当てにアリがタネを巣まで運ぶ。アリは巣の中で付着物をはずした後、タネそのものはゴミ

として巣の外へ運び出す。このように、スミレ類は自力でタネをとばす他に、アリに運ばせることによってより遠くまでタネを分散させている。アリを使ってタネを分散させている種はスミレ類のほかに、カタクリやエンレイソウ類があげられる。



エゾノタチツボスミレ。果実。熟すと三つに割れて、中から褐色の種がこぼれ落ちる



エゾノタチツボスミレ。白い花もよく見られる。

配慮事項

生育している環境全体が大切である。

参考文献

「改訂版 牧野新日本植物図鑑」牧野富太郎 北隆館 1989

「北海道植物図譜」滝田謙譲 自費出版 2001

「日本の野生植物 草本II」佐竹義輔・大井次三郎 他 平凡社

1982

「日本山野草・樹木生態図鑑」沼田眞 全国農村教育協会 1990

「北見の蝶」木村辰正 北見市教育委員会 1994

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)
草花

(外来種)
草花

哺乳類

(水辺)
鳥類

(葦原・樹林)
鳥類
ワシ・タカ